生きるってさぁ？

knight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生きるってさぁ？

【Ｎコード】
Ｎ１５９０Ｙ

【作者名】
ｋｎｉｇｈｔ

【あらすじ】
次々と襲い掛かる、不幸の大連荘。
生きる事に疲れきった主人公が、ビルの屋上で遭遇した眩しい光。
神とも悪魔とも良く判らない怪しい光に呼ばれて最後の一歩を踏み出した。
光を抜けて目の前に現れたのは
都会とはかけ離れた広大な大自然だった。
ありえない現象、目の前に広がる、深い森。

ここは……

やがて一人静かに動き出す。

いったい、この先に何が待ち受けているのか……

第一節（前書き）

拙い文章ですが、どうぞ宜しくお願いいたします。

第一節

今日は２０歳の誕生日。
一人、タバコに火をつけて星空を見上げた。
何十回目だろう……　またこのビルの屋上の淵に立っている。

光が見える……
だが、明らかに星ではない……
なんだ？

その光はこちらに近づくにつれ光量を増してくる。
やがて目の前は見て居られないほどに眩しく輝き
辺りは真っ白に包まれた。
あまりの眩しさに、おもわず腕をかざす。

やがて誰かが……　いや、光が語りかけて来た。

「私を信じるなら、前へ踏み出してみよ」と……

そんな台詞、どこかで聞いた事があるような？
あぁ、思いだした……　あの時だ。
ずいぶん昔に友人の親に勧められて強引に連れて行かれた教会で
散々と神の話を聞かせられた事がある。
あの時に出てきた話だ。
もしかすると、目の前の話している光がそれなのか？
だが、神を見た人なんて最近では居ないはずだ。
何故か太古の記述の中では神が人の前にガンガン出て来るのだが
今の時代は人前に出てこないのが定説になっている。

あの当時、
「何故、ここに神は姿を現さないのか？」と質問する私に
「見ずして信じられる者は幸いです」などと
苦しい言い訳をしていたのを良く覚えている。
教会の牧師が言っていたのだから間違いない。

それに、たまに神を見たなんて話があっても
激しく信憑性に欠ける話ばかりだ。
目の前の光を、神だと断定するにはあまりに押しが弱すぎる。
そもそも、眩しいだけだし……
その時、また声が聞こえた。
「恐れることはない、来なさい」
いきなり、そう言われてもなぁ？
全く前置きが無いし……
せめて名前くらいは名乗って欲しい……

まぁ、普通なら行く事は無いだろう。
なんか、イカサマ臭いし……
それに一歩進めば硬いコンクリートへ
落下するしか道はないのだ。
しかし実際の所、もう何もかもがどうでも良かった。
それが神であろうが悪魔であろうが、もはやどうでも良い。
私はその言葉に従い、素直に前へ踏み出した。

第二節

すでに何度、死のうと思ったことか数え切れない。

これまでの間、何も楽しい事が無かった訳ではない。
だが、辛い事があまりにあまりに多すぎた。
どこが始まりなのかはすでに曖昧だが
すでに小学生の時には何もかもが歪み始めていたように思える。
私の家族は父と母、祖父母。私を合わせて5人だ。
まぁ、どこにでも居そうな普通の家庭だった。
小学3年の大晦日に
父親の居眠り運転が原因で3人の歩行者を死亡させてしまった。
そして現場から逃走。
父は山中で首吊り自殺を図った。
被疑者死亡……
たぶん、ここが始まりだろう。
ここから私の転落人生がスタートを切った。

それは見事な急降下だった。
祖母が子宮ガンになり、近くの医者の誤診により発見が大幅に遅れ
大きい病院で発見した時はすでに他の内臓に転移。
その闘病中に祖父が心筋梗塞で入院。
何もかもに手が回らない時に、母が腹膜炎を起こして緊急入院した。
何とか母が退院した頃には、自営で営んでいた個人会社は火の車。
自転車操業でなんとか粘るも、祖母の病状が悪化し鬼のような治療費が降りかかる。
私達の家は第三抵当にまでなり、借金の嵐。

中学の頃、

長い闘病生活の末に
祖父母が逝くのを見届けると、母が一時行方不明になった。
私は借金取りしか来ない家でサバイバル生活を続けていると
数ヵ月後に警察が尋ねてきた。
しかし所轄が違う警察官だ。
どうやら私の事では無いらしい……
さては、母が何かやらかしたか？

神妙に話しだす警察官の話を聞いてみると、
母が結核で入院していて、それを伝えに来たのだと言う。
だが、金の無い私は何処にも行く事が出来ないので
どうにも出来なかった。
警察官も困り果てて財布から金を出そうとするが
私はそれを静止した。
敵に塩を送られたくは無い……

私は母が居なくなった後に
本当に困り果てて警察と区役所に相談に行った事がある。
そして警察には事件ではないからと門前払いされ、
区役所からは保護できるシステムが存在しないからと追い返されて
いた。
警察官は、今は状況が違うから何か方法があるはずだと言うが、
私にとって警察と言う組織は、もはや恨みの対象でしかなかった。
そして世間の不条理によってサバイバル生活に追いやられて
玄関で怒鳴り続ける借金取りのヤクザ達と一悶着を起こし、
一匹狼で危ない橋も渡ってきた私は、以前の素直な心など持ち合わ
せてはいない。
もはや、くだらない大人共の話など聞く耳を持っていないのだ。
下手に説教などしてきたら、その愚か者に殴りかかる事間違いなし。
傷害事件など起こすくらいなら、端から関わらない方がマシだ。

その事情を話し丁重に断ると、
申し訳ないと謝られてしまった。
所轄が違う警察官個人に責任が無いだけに、
私としては非常に微妙であるのだが……
とりあえず、母には無事に生きている事を伝えてくれるそうなので
一応礼は言っておいた。

そして一年後に母が帰って来た。
中学2年も終わりに近づいていた頃である。
まぁ、とうの昔に学校なんぞ行っていなかったのだが……
私は何も聞かなかったが、母がポツリポツリと話し始める。
それによると、あの日、金策の為にどこかへ向かっていたらしい。
だが、電車の中で意識を失ってしまったそうだ。
そして気が付いたのが結核病棟。
何か心当たりは無いかとを聞かれたらしいが、つい先日に近くの病院で
風邪だと診断されて帰って来たばかりだった。
ここでも誤診が発覚するが、当時は医療裁判など素人が勝てる物ではない。
泣き寝入りが基本だったのは事実である。

ある程度進んでしまった結核の場合、外出が禁じられていて面会謝絶。
完全に隔離されて、帰る事など到底出来ない。
家の電話は止まっていて、連絡は出来ない。
協力してくれそうな親戚も、皆無であった。
手紙は出したそうだが、私の元には届いてはいない。
その後に母が入院する病院に借金取りが押し寄せ大変な騒ぎになったそうだ。

悪質な借金取りが母の行き先を探す為に郵便を盗んでいたのだろう。
病院側が警察を呼んで解決したそうだ。
そんな事情で連絡を諦めかけていたそうだが、
例の騒ぎの時に母の事情を聞いた警察官が心配して
わざわざ私の安否確認に来てくれたそうだ。
ありがたい話ではあるが、私としては微妙な心境である……

そして、もうこの家はダメだそうだ。
すでに競売にかけられているそうで、金を返す当ても無い。
近いうちに強制退去させられるだろう。
次から次へと現れる喧しい借金取りにもいささか嫌気が差していたので
そのまま、私達は夜逃げを決行した。

生活保護でひっそりと生活していた私達親子だったが、
まだ母が若かったのが問題だった。
母目当てに出入りする男共は、それはロクな者では無い。
あそこまで男運が悪いと、もはや見事としか言いようがない。
私達の心は、さらに荒んで行った。

やがて酒浸りになってしまった母が亡くなったのが一ヶ月前の事だ。
浴びるように酒を飲む母に何度も注意を促してきたが
一切聞く耳を持ってはくれなかった。
「もう、何時死んでも構わないんだよ」と笑顔で答える母は、
もはやこの世に未練は無いようだった。
あの何かを悟ったような笑顔に、私は何を言えるのだろうか？

死因は脳溢血だった。あまりに突然の死だったが、
せめて苦しまずに逝けたのが何よりだ。
私は、死の寸前まで苦しんだ祖母の姿を見ている。
それが無かっただけマシだ。
これまで地獄のような人生を味わい
あそこまで苦しんで来たのだ、もういいだろう。
現状でさえ、十分に残酷物語なのだ……
全く、神も仏もあったものではない。

そして、遂に私は天涯孤独だ。
私達家族が生きた、あの生き地獄。
絶望しか見当たらない、この世界。
何からも救われなかった、残酷な人生。
もはや私は、生きると言う行為に疲れ果てていた。
私は静かに呟いた。
それは母への問いだったのか、己への問いだったのか判らない。
「私も、もういいよね？」

落下を覚悟した私は一歩踏みしめる。
その瞬間、急激な重力加速度が襲い掛かる……
はずだった……

光が、また語りかける
「さぁ、私の元へ来なさい」
生きているのか死んでいるのか、もはや良く判らない。
だが、私に選択肢は無いようだ。
その言葉に従った。

光の中へ入ると、そこに別世界が広がった。
大自然と言うべきだろうか？
そんな世界だった。

第三節

これは……　参ったな……

目の前に広がる大自然に思わず放心してしまう。
だがその時、私の中で何かがざわめいた。

これまで、かなりハードな環境だった事もあるが
この能力に気が付いたのは、ひき逃げに遭った後だ。

何か嫌な感じがする……
そう思う時は必ず何かが起きる。
その嫌な感覚を無視して、その日の予定を優先した結果が
この右足だ。
あの時に良く判った。
それまでも、その手の勘はあったのだが
あまり気にしていなかった。
だが、改めてその勘を気にして動いてみると。
危ない所で回避という現象が多々起きるようになる。
バイクで細い道を走っていた時が良い例だ。
前の信号が青だったので、そのまま進行しようとした時に
嫌な勘が全身を過った。
慌てて減速すると目の前を信号無視した車が
とんでもなく偉い勢いで通過していった。
もし、あのままの速度で走っていたら
思い切り吹っ飛ばされて死んでいたかもしれない。
生きていたとしても、かなりヤバい事態に陥っただろう。
そんな事を何度も繰り返すうちに
自然と勘に頼るような習性が付いていって、

いつしか、この危険回避能力は私にとって無くてはならない物となっている。
その第六感が今現在、全身で大騒ぎしているのだ。
それは交通事故のような一時的な危険ではない。
長期に渡って命が危険に晒される事を物語っていた。

とにかくこのままでは危ない事は確か。
心を冷静に保って、今出来る事を整理した。

まず、一番にやらなければならない事は
安全に眠れる場所の確保だ。
それは雨風に耐え、尚且つ温度変化にも耐える場所でなければ意味がない。
できる事なら、ある程度の防衛対策もかねた場所がいい。
これを明るいうちに確保できなければ死を意味する。
夜の野外は人が予想する以上に寒い。
そして、夜行性の獣は基本的に獰猛だ。
人間の目は闇の中では使い物にならない。
そんな時に敵を確認出来ないまま襲われれば
何の抵抗も出来ずに食い殺されるだろう。
今は、安全の確保が最優先事項なのだ。
現状、他の事は後回しにしても一向に構わない。
食事など、一週間は食べなくとも十分な体力を維持して生きていける。
最悪、水は4日以内に確保すれば何とかなる。
そして水さえ確保できれば、例え食べ物が無くとも3ヶ月は生きていられる。
人間は、飢餓状態を超えた時に空腹を忘れる。

そして、己の脂肪を栄養源にして生きる望みを繋げるのだ。
これはサバイバル時代に実証済みである。
私は森の中を歩き出した。

その時に、何か足に違和感があった。
なんだ？
そこには、普通の右足があった。
しかし、それは私にとって異常事態。
ありえない事なのだ。

私は１５歳の時にひき逃げに遭って
ゾンビのように変わり果てた右足と付き合っていた。
一時は切断を仄めかされたほど重症。
踵から指先にかけては粉砕骨折。
スネの後ろからは骨が飛び出て、大腿骨も折れていた。
折れていない骨は親指のラインの一部だけ。
右足の９割は複雑骨折の状態であった。
そして一度バラバラになってしまった骨は
元通りにはならない。
２年半は松葉杖にお世話になる日々だった。
だが３年目には激痛はある物の自分の足で立つことが出来て、一本
杖になり、
今では、意識すれば健常者に見える程度には誤魔化す事が出来る。
だが、何かと右足を引きずり気味になるのは普通の出来事。
痛みは、あれからずっと残っているのだ。
簡単に言えば身体障害者である。
だが、この中途半端な治りかたのお陰で、障害手帳を申請しても
行政は認めてくれなかった。
足が半端に機能してしまうと、重症であっても申請は通らないそう
だ。

自主的なリハビリを行った為に、基準以上の角度まで動いてしまう。
粉砕して間接が存在しないはずの指は微妙に動く。
足の短縮も総合計で２．５?、等級の基準は３ｃｍからであった。
激しい痛みはあっても、確実に足として機能してしまっている。
どこの等級基準にも引っかからない微妙な重症。
切断にならず、足が残っているだけマシなのかもしれないが……
全く、この足のお陰でずいぶんと嫌な思いをしたものだ。

　だが、今の右足はどうだ?
何故、痛みがない?
恐る恐るジーンズを捲り上げると
そこには左足と見勘違うような普通の右足があった。
どうなっているのだ?
カクカクと動かしてみるが、それはやはり普通の右足であった。
まぁ、今は判らない事ばかりだ。
深く考えるのはやめよう。
この深い森の中、普通に動けるのはむしろ有難い。
太陽を見れば、すでにかなり傾いてきている。多分、午後二時頃だろう。
一応、携帯電話で時間を確認してみたが００：５６になっている。
そう、本来なら今は深夜のはずだ。
だが、このまま悩み続けて居られる余裕は無い。
あと４時間もすれば辺りは闇に包まれる。
夜の森の中でたった一人の状況は危険以外の何物でもない。
とにかく今は急ごう。
手頃な棒を拾って覆いかぶさる植物を避けながらひたすらに進んでいった。

第四節

途中で丈夫そうな木を見つけると、
手持ちの棒と見比べて何度か交換しているうちに
硬くて真っ直ぐな良い感じの棒を見つけた。
杖にもなるし、攻撃力も高そうだ。
本当は刃物が欲しい所だが、残念な事に
いつもキーホルダーの代わりに付けているツールナイフしかない。
５?程のナイフやハサミ等を引っ張り出して使うツールである。
サバイバルグッズとして意外に有名だが、
それほど万能な物でもない。
そもそも職務質問されて最悪没収されても良いように、
１００均で買った物だ。
最初は使い物にならない程に酷い商品だったが、
分解と調整をしてナイフの刃は砥石で完全に立て直した。
とりあえずは使える状態までになったが、
耐久性には相当の不安がある。
とても武器にはなりそうにない。
それでも、何も無いよりは遥かにマシで
これを持っている事で、精神的に安心感を与えてくれている。
だが、武器として考えるなら、リーチの長い木の棒の方がよほど有効なのである。

歩き続けて、一時間が経った。
深い草むらを抜けると、
視線の少し上に小さめの洞窟が見える。
とりあえず、あそこを目指してみよう。

洞窟の入り口に辿りついた。

この状況で、テレビに出てくる探検隊のように
いきなり堂々と入って行くのはさすがに頭が悪すぎる……
まずは、様子を伺ってみよう。
詳しくは判らないが、特に獰猛な気配は無いようだ。
次に拾った石を奥に投げ込んでみた。
何か硬い物に当たったようだが、これと言って反応は無いようだ。
さてと……
暗闇に注意しながら、静かに中に入って行く。
これ以上行くと、完全に暗闇だ……
携帯を出してライト代わりに照らして確認してみる。
奥に何かあるようだ……
確認してみると、手作りのテーブルのようなものが置いてあった。
拾ってきた木で作ったようで完成度は微妙だが
それなりに良く出来ている。
その横から覗き込んでみると、奥に骨がある。
何の骨だ？
近づいて確認してみると人骨のようだ。
完全に白骨化した頭蓋骨を見ると、猿ではないと思う。
棒で突付きながら上に向けてみると
見事に見覚えのある人間の頭蓋骨であった。
ここが何処だか知らないが、人間が存在するようだ。
そしてここは、きっとこの人が使っていた場所なのだろう。
だが、とりあえず骨は後回しだ。
他を見回してみる。
生き物の糞は無いようだ。
転がる残骸を見ても、他の動物が住んでいる様には見えない。
それは非常に有難い事だ。
下手に動物の住処に居れば襲われる事は間違いない。
この棒一本で勝てる自信も無いので、それは避けた方が良い。
ひとまず、ここは荒らされていないと考えていいだろう。

かなり良い所が見つかったものだ。
人骨に手を合わせて、黙祷する。
「落ち着いたら墓を作りますので、しばらくここ使わせてください」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1590y/

生きるってさぁ？

2011年11月5日04時16分発行